

日本 武尊山(標高2158.3m)

田園理想郷のむらづくり

4つのキーワード

I 農業プラス観光(政策)

II 都市交流事業(世田谷区)

III 道の駅川場田園プラザ事業

IV 木材コンビナート事業

+

新拠点構想

田園理想郷®
(商標登録)

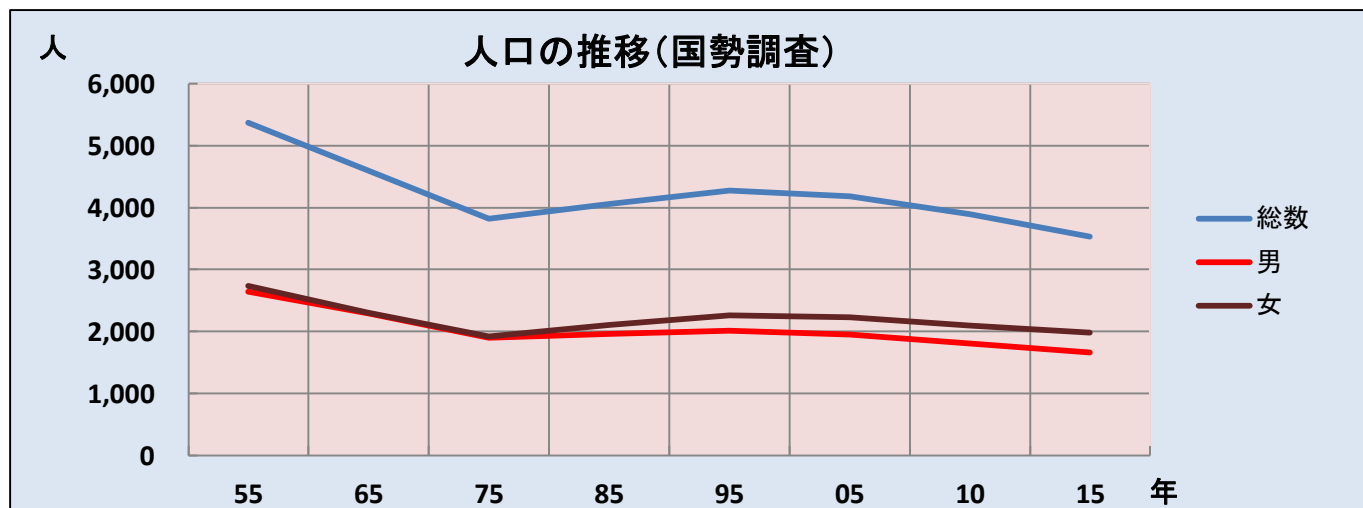
群馬県 川場村

□ 川場村の地勢

○ **位置** 群馬県の北部地域に位置し、日本百名山のひとつ武尊山の南麓に位置する。

○ **面積** 総面積 85.25 km²
その内、森林が 83%（うち国有林 55%）、

○ **人口** 耕地が 7% を占める自然豊かな農山村である。
3,647 人（平成 27 年国勢調査）
高齢化率は、40.7%



○ **河川** 武尊山を源とする4本の一級河川
武尊山の伏流水が湧水となり村に恵みをもたらす。

○ **交通** 上越新幹線 上毛高原駅から車で40分
JR上越線沼田駅から車で25分
関越自動車道沼田ICから車で10分

○ **産業** 基幹産業は、農業。

米

- ・川場産コシヒカリをブランド化（雪ほたか）
- ・国際的コンクールにて12回の金賞を受賞

こんにゃく(芋)

- ・全国生産の9割以上を群馬県内で生産

りんご

- ・ふじ、ぐんま名月、スリムレッド、陽光etc.

他ブルーベリー、トマト、なす、野菜多品種。

I 農業プラス観光

それまでの基幹産業である農業に観光を加えた村づくり

〔背景〕

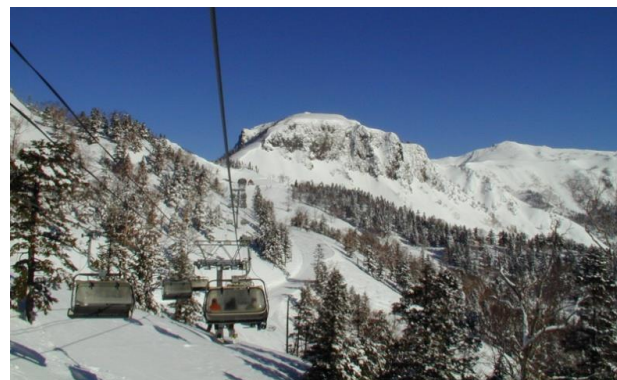
- ・S40～50年代の人口減少
- ・村存亡の危機感

〔取組〕

- ・1977年(S52) ホテルSL事業
- ・1980年代以降 スポーツ施設整
テニスコート、キャンプ場、スポーツ広場
- ・1989年(H元) 川場スキー場
- ・2012年(H24) 天然芝サッカー場



「ホテル田園プラザ(旧ホテルSL)」



「川場スキー場」

Ⅱ 都市交流事業

1. 区民健康村づくり計画

1979年(S54)世田谷区基本計画の重点プロジェクトに位置づけ
区民の「第二のふるさと」づくり

2. 候補地選定

1980年(S55) 52市町村の中から川場村が選ばれる
選定理由「川場村には何も無いから」

(観光地も繁華街もない = 豊かな自然と田園景観が残る)

3. 協定調印

1981年(S56)「区民健康村相互協力協定」

(縁組協定 = 結婚 > 姉妹提携の関係)

4. 交流拠点施設(区民健康村)世田谷区整備事業

① 1986年(S61) 2ヶ所の区民健康村施設を整備

「ふじやまビレジ」・「なかのビレジ」

② 1986年(S61)「(株)世田谷川場ふるさと公社」設立

施設の運営維持管理を行う第三セクター

交流事業のプログラミング・コーディネートを担う

5. 移動教室

世田谷区立全小学校5年生(約6千人)参加

2泊3日で農作業・登山・村巡りを体験

村民は指導者として関わる



移動教室 (農作業体験)



ふじやまビレジ



なかのビレジ

6. 交流事業

① 1992年(H4)「友好の森事業に関する相互協力協定」

縁組協定10周年記念事業

川場村の森林環境を区民・村民が協働して守り、育てる

② 里山自然学校

- ・里山塾(森林(やま)づくり塾)
- ・農業塾
- ・こども里山自然学校 etc.

③ 物産販売

世田谷区内の祭り、イベント等で川場村物産を販売



里山塾(養成教室)



こども里山自然学校

Ⅲ 田園プラザ事業

1. 目的と多機能性

- ・ 村の情報発信拠点機能
- ・ 村民相互、来村者との交流・情報交換の場
- ・ 農産物の消費拡大
- ・ 地場産品の開発、PR、消費拡大と流通促進
- ・ 就業の機会の拡大
- ・ 来訪者の購買ニーズへの対応と飲食の提供
- ・ 村内消費の拡大
- ・ 災害時避難施設機能



道の駅田園プラザ川場全景

2. 事業規模

当初整備期間 平成4年度～平成10年度

敷地面積 60,000m²

事業費用 31億4千万円

グランドオープン 平成10年

(以後、機能向上とニーズに対応するため、増設・リニューアル(進化)を継続している)

3. 運営状況

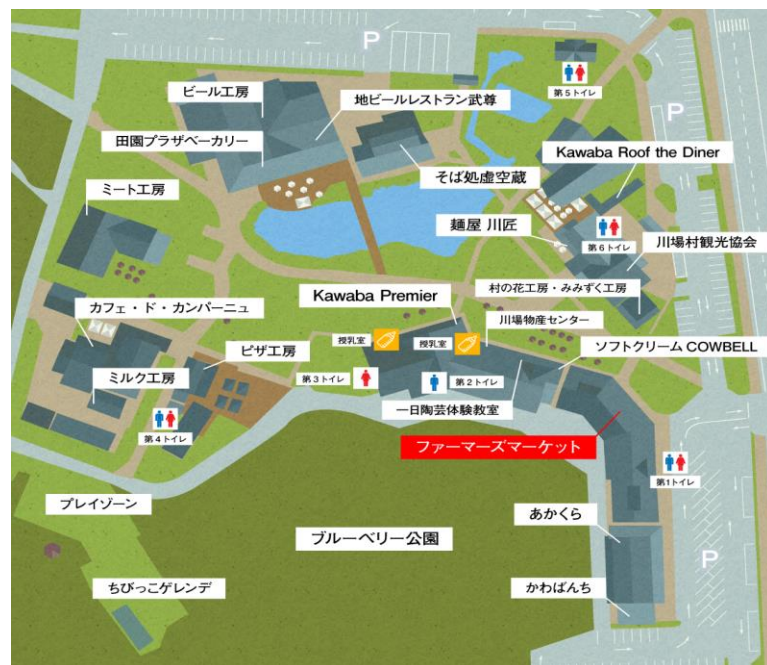
①第三セクター「(株)田園プラザ川場」(指定管理)

- ・従業員数 社員56名 パート51名
- ・年間売上高 16億円(R1)
- ・来場者数 198万人(R1)

4. 田園プラザ内施設

- ・ミルク工房
- ・ファーマーズマーケット
- ・プラザセンター、事務所、研修室 他
- ・ミート工房
- ・そば処「虚空蔵」
- ・ビール工房、レストラン、パン工房
- ・ピザ工房
- ・カフェドカンパーニュ
- ・カワバプレミア
- ・カワバルーフ(大型避難施設)
- ・緊急避難ヘリポート
- ・フレッシュチーズ工房

田園プラザ川場MAP





ビールレストラン武尊

そば処虚空蔵



カワバルーフ(大型避難施設)



ちびっこプレイゾーン



かわぼんち 雪ほたかおにぎり

フレッシュ
チーズ工房



ソフトクリーム(カ
ウベル)

ピザ工房



ウッドビレジ川場の取り組み

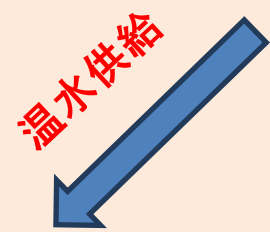
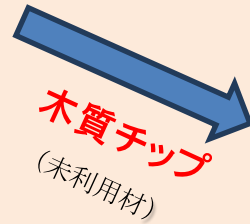
製材・発電・農業

木材コンビナート
(株) ウッドビレジ川場



製材施設

H28. 4月 稼働開始



木質バイオマス発電

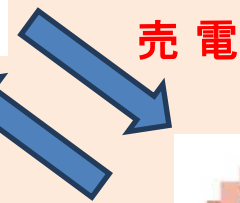


〔木質ガス化装置・熱電併給装置・チップ乾燥機〕

H29. 4月 稼働開始予定

- ・発電量 45kwh
- ・熱出力 105kwh

廃熱利用



売電

事業参加

- ・寄付、投資etc.



農業ハウス

(イチゴ栽培)



H28. 11月栽培開始

(作付面積)

H28 1,000㎡

H29 1,000㎡

(イメージ)

※今後の展開：他品種の野菜、果樹の栽培或いは足湯施設の整備等を検討。

【世田谷区・川場村の連携】

「川場村における自然エネルギー活用による発電事業に関する連携・協力協定」(平成28年2月15日)

- ・自然エネルギーを媒体とした地域間交流のモデルケース。
- ・川場村の電気を世田谷区民が購入したり、事業に参加したりするための仕組みづくり。

木材コンビナート製材施設



ストックヤード



全景



チップ製造



製材機械

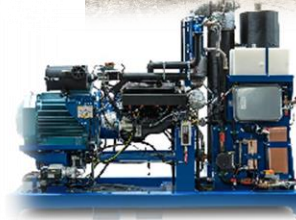
もり 農業ハウス(森林のいちご園)



もり 発電施設(森林の発電所)



左:ガス化装置、発電機 右:乾燥機



学校机の天板



「学校林」

川場村には100年以上の歴史を持つ学校林(村有林)がある。

子どもたちの教育環境の充実に役立てる資産とするため、先人たちがつくったもの。

毎年、春と秋に小学生と中学生が、下草刈りや防火線の手入れなどの作業を行っている。



学校林(村有林)の間伐材を使い
学校机の天板を製作

入学時に配布



在学中自分のものとして使用



卒業時に思い出の記念品

H28年度小・中学生(270名)

全員に配布済

H29年度以降、新入学生に配布

J-クレジットの取り組み

GVPを通じて村有林を整備することでCO2収量量が増大する。

取得するJ-クレジットは、共同でGVPに取り組んでいる清水建設がビルのカーボンオフセットに活用してゆく予定。

吸収量の計画

期間	吸収量
H27年度	117 t-CO2
H28年度	114 t-CO2
H29年度	112 t-CO2
H30年度	103 t-CO2
H31年度	93 t-CO2
H32年度	93 t-CO2
合計	632 t-CO2

新しい「むら」の風景を創る

平成28年度川場村新拠点構想マスタープラン

川場村新拠点構想

群馬県川場村は、「田園理想郷」を目指して、全国モデル道の駅にも選ばれた「川場田園プラザ」を中心とした観光と農業による村づくりを進め、今では年間150万人を超える来訪者を迎えるまでとなっています。

そうした中、川場村では、この田園文化の流れを次世代に引き継ぎ、地域独自の新産業の創造や地域そのものに特化した地域経済活性化の構築を目指す「地域経済活性化の聖地」とするべく、次なる村づくり構想に取り掛かりました。これは、老朽化した役場の建替や小中学校の移転統合などを求めた、村の中心エリアの再構成を軸に、村内外の施設や組織との連携も視野に入れながら、次の50年あるいは100年に向けた新たなビジョンを示そうというものです。

ここでは、その骨格となるキーワードなどを示しながら、素案の一例を示します。

計画指針 -3つのキーワード-

川場村が実現したいこと

1. 川場らしい「むら」の風景

田園理想郷を目指す川場村の大きな財産である「むら」としての風景を活かし、画一的な都市計画とは異なる、この地域ならではのあり方を目指します。村の発展を日進すると同時に、観光客など外から訪れる人々が川場村に求めるものを表現していくことも重要です。

- 豊かな自然環境
- 良質な農村風景

2. 柔軟で可変性のある計画

役場や学校の移転を伴う今回の計画は、一歩一歩で完成するものではありません。全体を見通す長期的ビジョンと、施設ごとまたはエリアごとの中・短期ビジョンをしっかりと持ちながら、一方で、社会的状況や経済状況に応じて計画を柔軟に修正することも重要です。

- 点在する複数の施設（主屋と離れ）
- 将来的な機能転換や用途変更

3. 自立型地域経済活性化の聖地

地域独自の新産業の創造と、地域そのものに特化した地域経済活性化を推進するため、産官学の連携によりハードとソフトの両面から計画を進めます。県内外を問わず、これからの農山村活性化のモデルともなりうる新しいビジョンの確立を目指します。

- 地域に根づいた経済活動
- 社会の期待と関心の反映

川場村新拠点構想マスタープラン

計画地全体ゾーニングイメージ



この地区が村の基地となり、ここから村内各地区（集落）へ人や物の交流が展開していくことを目指しています。

1. 川場らしい「むら」の風景をつくる

山に囲まれ、美しい田園が広がる川場村の風景は、日本各地で失われつつある風景です。土地の形状に沿ってうねるように築く道もまた、都会の「機能的」な道路網とは異なる趣を持っています。良地を活用して開発を行う今回の計画においても、こうした川場村の風景を活かしたむらづくりを目指します。なお、拠点施設の整備エリアとしては、既存施設との連携なども考慮し、主要幹線道路に沿ったエリアを想定しています。

農地・非農地（集約地）ゾーニングイメージ



× 都会的な開発手法
農地と非農地を明確に区分し、それぞれの区画の中で、機能的に施設配置を行う。
→ 川場村の「良さ」が消えてしまう。

○ 川場村でのあり方
必要な線引きは行いつつ、境界を明確には定義せずに、良質な田園風景から成立するのではなく、同じ風景の連続の中に必要な機能を点在させていく。
→ 川場村らしい風景をつくる

2. 柔軟で可変性のある計画

多くの機能を並列した大型施設を建設するのではなく、点在する複数の施設を連携させていくことで全体像を強く計画とします。主要な機能を軸とし、付随的な機能を施設を混在させることで、将来的な機能転換や用途変更などにも柔軟に対応できます。その上で、エネルギー（施設）や駐車場については、できるだけ共有化を図り、施設の増加が村の負担にならないような計画とします。一般に大型の施設を建設する必要がないため、必要な時に必要な施設を自由に計画を進めていくことが可能です。また、施設を分棟化することは、10m近い敷地東西の高差差を解消する点からも合理的な計画です。

用途の配置例



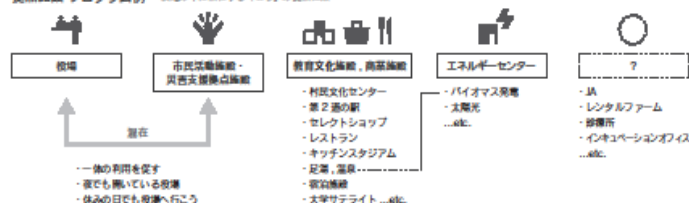
施設と農地と緑地、内と外、実と民、モシャッフルする。村役場が土曜となり、そのゆるやかな施設を離れとして点在させる。

3. 地域経済活性化の聖地

村の発展を導いた計画であることはもちろんですが、そこには、観光を目的に訪れる人々や、様々な分野で連携を図る県民、さらには大学や他の研究機関との連携など、広範囲におよぶ多種多様な関わりがあり、そうした中でのような取り組みが求められるています。既存の施設の活用や、周辺を有効な土地利用も視野にいれながら、人やものの広域ネットワークの構築と施設づくりをリンクさせることで、世代を超えて将来にわたるむらづくりを目指します。また、こうしたネットワークによって、人々が村中を巡ることになり、観光ツーリズムの両面につながります。



拠点施設 プログラム例 - 農地の中に点在する「むら」の拠点施設 -



→ 一体的利用を促す
→ 夜でも開いている夜場
→ 休みの日も夜場へ行く

新拠点整備計画配置図

